

熊本県博物館ネットワークセンターだより 熊本の自然と文化

編集・発行 熊本県博物館ネットワークセンター

2026年2月20日



©2010 熊本県くまモン

No. 63

イベント情報 (令和8年3月～)

企画展

会場：熊本県博物館ネットワークセンター

入場無料

収蔵品展 未来に受け継ぐたからもの

収蔵品展 未来に受け継ぐたからもの

開催期間 令和8年3月24日(火)～8月2日(日)
開館時間 9:00～17:00

*月曜日休館(月曜日が祝日の場合は翌火曜日)
*6月1日(月)～8日(月)は展示入替のため閉室

後援 熊本県教育委員会、宇城市教育委員会



現在まで受け継がれてきた歴史分野の収蔵品の中から今までにお見せできていなかった「たからもの」を紹介します。

また、4月と7月に展示解説会等を開催します。下の二次元バーコードよりお申し込みください。

↓申し込み二次元バーコード↓



4月25日(土)



7月11日(土)

展示解説会・バックヤードツアー(各回定員15名)

4月25日(土)、7月11日(土)

①午前10時～11時 ②午後2時～3時

熊本県博物館ネットワークセンターからのお知らせ

博物館ネットワークセンター公式 SNS のご案内

博物館ネットワークセンターでは、下記の SNS 公式アカウントを開設しております。イベント情報や新着情報、収蔵品や当センターの発行物の紹介など、様々な情報を発信します。ぜひ、ご覧いただくとともに、「フォロー」と「いいね」をよろしくお願いいたします。

- ◆X アカウント ID : @kumamoto_mnc
- ◆Facebook アカウント名 : 熊本県博物館ネットワークセンター
- ◆Instagram アカウント ID : @kumamoto_mnc



博物館ネットワークセンターアイコン



博物館ネットワークセンター公式 SNS 開設のお知らせ

※本アカウントは情報発信専用のため、コメントやメッセージによるお問合せ・御意見への返信は行いませんので御承ください。
※SNS 運用方針は当センターホームページに掲載しています。

熊本県博物館ネットワークセンターの学習支援活動、展示活動

熊本県博物館ネットワークセンターでは、学習支援活動として学校や PTA 活動、子ども会活動などで利用できる「移動体験教室」、学校や教育施設等への動物・植物・地学・歴史・民俗の各分野職員の「講師派遣」を受け付けています。また、展示活動として公民館や図書館等での「移動展示」、学校での「学校移動展示用パッケージ」及び、学校や社会教育施設、社会福祉施設での「どこでもミニ移動展示用パッケージ」の運用を行っています。

詳細は当センターのホームページをご覧ください。

<移動体験教室プログラムの一例>古銭レプリカを作ろう・草木染め
<どこでもミニ移動展示用パッケージの一例>熊本県で見られる化石



No. 324
地学

温泉地の噴気からできた食塩

火山等の地熱が高い地域では、温泉だけでなく、高温のガスが噴き出しています（噴気）。そして、ガスの噴出孔付近では、ガスに含まれていた成分を元にして、鉱物ができます。図1は、そのようにしてできた食塩の塊で、小さな結晶が集まっています。阿蘇郡小国町と大分県玖珠郡九重町との境にある涌蓋山の麓、わいた温泉郷のはげの湯で掘削したボーリング孔内で採取されました。海から離れたこの地域で、どうして食塩があるのでしょうか。

涌蓋山は、活火山ではありませんが、地熱が豊富な古い火山です。そして、わいた温泉郷の岳湯からはげの湯にかけて、自然の噴気孔や蒸気井があり、そこからガスが噴き出しています。この地域のガスは、地下にある200～250℃の熱水から分離したものです。

この地域の温泉は、塩化物泉（食塩泉）や硫酸塩泉、炭酸水素塩泉等様々です。これらは、マグマから出たガスと地下水が一緒になってできた熱水が、岩石の金属成分を溶かしたり、地下水と反応したりしてできたと言われています。つまり、この食塩は、古い海水の塩ではなく、マグマ由来のガスが地下水や岩石と反応することでできたものなのです。（廣田志乃）

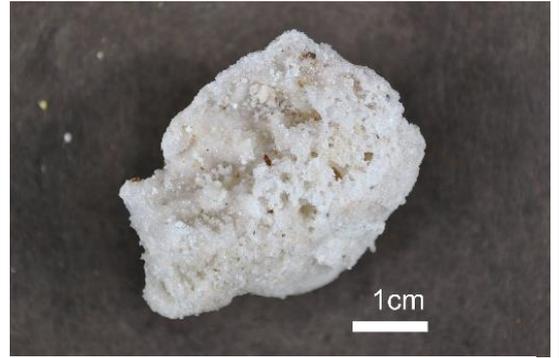


図1 温泉地の噴気からできた食塩

No. 325
民俗

灰式懐炉

懐炉は懐にいておなかや腰などを温める、携帯できる小型の暖房器具です。

日本では長い間、温石おんじやくといって、石を温めたものを布に包んで懐に入れて暖をとっていましたが、元禄時代(1688～1704)に、炭の粉に桐やなすの茎などを黒焼きにした灰を混ぜたもの（懐炉灰）を、通気口のついた金属の小箱に詰めて、弱い熱で長時間燃え続けるようにしたものが発明され、懐炉と名づけられました。

明治時代になると、懐炉は、よりコンパクトに、より安全に、より暖かくなるよう工夫が凝らされ進化しました。例えば図1の懐炉は、内部を二重構造にして安全性を高め、外側にビロード生地を貼って温かい肌触りとなっています。また、懐炉灰も、固めて紙袋に詰めて使いやすい状態で売られるようになったため、懐炉は安価で簡便な暖房器具として普及してきました。

後に図2のような、気化したベンジンが白金触媒により酸化分解する時に発する熱を利用した懐炉や、鉄の酸化反応を利用した使い捨て懐炉が広まったことで、従来の懐炉は灰式懐炉と呼び分けられるようになりました。さらに現在は、懐炉灰の国内製造が行われていないため、日常で灰式懐炉が使われることはほとんどなくなりました。しかし、登山家などの間では、灰の代わりに木炭などを燃料にして今でも愛用されているそうです。（迫田久美子）



図1 灰式懐炉

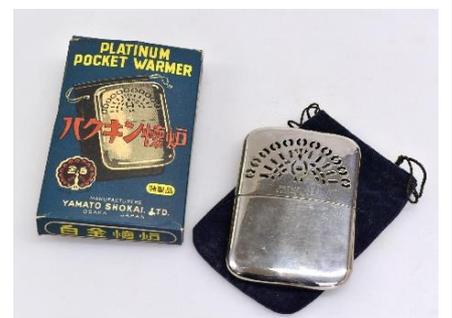


図2 ベンジン懐炉

No. 326
動物

ツミ *Accipiter gularis* (タカ科)

ツミ(図1・2)は漢字で「雀鷹」とも書かれる日本最小のタカの一つで、♂はヒヨドリくらい、♀でもハトくらいの大きさしかありません。同属のハイタカ *A. nisus* にとってもよく似ていますが、飛翔時に尾羽がより太短く見えること、翼端の羽(外側初列風切)は5枚が分離して見えること(ハイタカは6枚)などで識別されます。

本種は比較的近い距離で観察・撮影できた場合、性や成長段階についても判別することができます。図1の標本(本剥製)の個体は、胸に暗褐色の縦斑、腹にはハート型の斑が散在することなどから幼鳥、図2の個体は、体の上面が青黒色で、虹彩が赤いことなどから♂成鳥と見なせます。

本種はとても気が強く、自分よりずっと大きいカラスなどに対しても激しく攻撃します。図2はアオバトを捕食しているところで、体が小さくても本種が猛禽類であることをあらためて認識させられます。

熊本県ではほぼ全域で確認記録がありますが、確実な繁殖確認例はきわめて少なく、「レッドリストくまもと2024」では絶滅危惧II類とされています。(中菌洋行)



図1 ツミ幼鳥標本(阿蘇郡産山村産)



図2 ツミ♂生態写真(八代市泉町)

No. 327
植物

ツクシイバラ *Rosa multiflora* var. *adenochaeta*

ツクシイバラは、球磨郡あさぎり町から錦町にかけての球磨川河川敷に自生するバラ科バラ属に属するノイバラの変種です。和名の「ツクシ」は、古い時代に九州全体や九州北部を示した地名「筑紫(ちくし・つくし)」のことです。現在では、四国の徳島県にも分布することがわかっています。ノイバラと比べて全体的に大きく、特に花はひとまわり大きい直径3~4cm、花弁は白色から紅色を帯びたものまで変異があります。また、花柄や花序の軸には紅色の腺毛が密に生えていることも特徴です。「レッドリストくまもと2024-熊本県の絶滅のおそれのある野生動植物-」では、準絶滅危惧(NT、存続基盤が脆弱な種)に選定されています。錦町の町花になっており、地元の保存会による保全活動も展開されています。



図1 ツクシイバラの開花期の標本



図2 ツクシイバラの結実期の標本

図1と図2の標本は、共に球磨郡上村(現あさぎり町)で採集されたものです。1981年6月13日採集の図1の標本は、ツクシイバラの特徴である大きな花と花弁が落ちた花があります。1931年8月12日採集の図2の標本は、結実期の標本で、多数の果実があり、花柄や花序の軸に密生する多数の腺毛も確認できます。

植物をはじめとして生物は、季節や成長によって姿を変えながら生きているため、季節や成長段階を変えて標本を作り、保存する必要があります。図1と図2のツクシイバラの標本は、同じ分類群であっても複数の標本を蓄積する意義をありありと示しています。(前田哲弥)

No. 328
歴史

しもましきぐんごうのえてながず
下益城郡河江手永図



図1 全体

本資料は、江戸時代後期に作製された河江手永^{ごうのえてなが}の絵図です。手永とは、当時熊本県の大部分を治めた熊本藩が郡と村の中間の行政組織として設置したもので、河江手永は現在の宇城市松橋町および小川町の範囲を管轄していました。

江戸時代に入ると、幕府は日本全国の把握のために絵図の編纂事業を行い、各藩に命じて絵図と土地台帳を作らせました。これらは江戸に集められ、幕府の実務に活用されました。それぞれの藩でも行政上の必要性から、幕府の事業とは別に独自に絵図作製事業が行われました。熊本藩では藩の指揮の下、村や手永、郡で絵図が作られ、藩中央に集められて藩政に利用されるとともに、そうした絵図の写しが各々

の役所に備え置かれ、実務に利用できるようになっていました。

絵図の内容を見てみると、下部には凡例があり、ここに示された11項目の記号によって町村、街道、河川、寺社などが表現されています。村は緑色の楕円の中に名称を記し、寺社は朱の○や□、道筋は赤色の線で特に目立つように描くとともに、木々や建造物、山林は絵画的、俯瞰的に描写するという江戸時代の技法によって表現されています。本図は「嘉永七甲寅年七月出来」と墨書(図3)があるとおり、嘉永7年(1854)に作製されたことがわかります。しかし、海岸の描写を見ると、

「手永開」^{てながびらき}「松橋新地」^{まつばせしんち}などの干拓地の表記が見られるものの、天保14年(1843)に着工した築添新地^{つきぞえしんち}や嘉永5年(1852)着工の網道新地^{あみどうしんち}、嘉永7年着工の砂川新地^{すながわしんち}が描かれていないことから、本資料はそれらの干拓地が築造されるより以前に描かれた絵図を写したものかもしれません。

現存する河江手永の絵図は数が極めて少なく、本図は現代まで残っているというだけでなく、作製年代が明らかであることによって内容の年代比定ができるという点で極めて貴重なものと言えます。本資料は令和8年3月24日から開催の企画展「収蔵品展 未来に受け継ぐたからもの」で展示しますので、ぜひ御覧ください。(古澤広大)

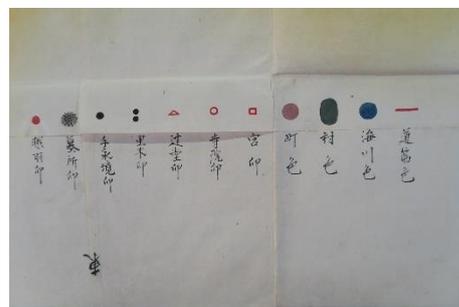


図2 凡例

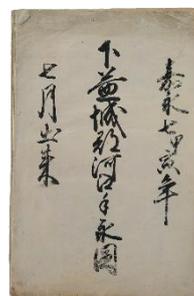


図3 表題

熊本県博物館ネットワークセンター

ISIL JP-2004104

〒869-0524 宇城市松橋町豊福 1695

TEL : 0964-34-3301 FAX : 0964-34-3302

E-mail : hakubutsuse@pref.kumamoto.lg.jp

HP : <https://kumamoto-museum.net/kmnc/>

[公共交通機関]

○九州産交バス

松橋駅より宮原経由

八代産交行き

「希望の里入口」下車

○JR

松橋駅より約3km

活動報告やイベント開催情報満載
↓公式SNSをチェック↓



<X>

<Facebook>

<Instagram>

